

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520234

研究課題名(和文) 近世前期出版における筆工の文化的階層に関する基礎的研究

研究課題名(英文) The basic study about the cultural hierarchy of the Calligrapher in the publication in the first half of the early modern times

研究代表者

母利 司朗 (MORI, Shiro)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：10174369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：近世前期に江戸で出版された独特の造本様式をもつ出版物は「江戸版」と呼ばれる。その挿絵の版下については菱川師宣に代表される江戸の絵師が関わったとされるが、本文の版下については不明である。本研究では、まず「江戸版」がいかにか「独特」「独自」であるかを吟味したが、結果的に、江戸版の本文版下は、上方浄瑠璃本の様式を基本的に踏襲したものであることがわかった。また、上方版と比べ自由闊達、時には厳しいまでに鋭角的な文字の書風を持つものも少なくないが、それらも当時の標準的な書流であった「御家流」の範囲内におさまるものであった。これらに筆工として従事した者たちは、武家の浪人たちであった可能性がある。

研究成果の概要(英文)：The publication with a unique production of books style published by the Edo era in an earlier period of early modern times is called "Edoban". It is said that an illustrator of Edo represented by Moronobu Hishikawa was concerned about the block copy of the cut, but is missing about the block copy of the text.

At first, in this study, "Edoban" "was unique" how and "own examined closely, but, as a result, understood that the text block copy for Edo followed the style of the upper part joruri book basically Jyoururibon". In addition, I was more generous than an upward version, and there were a lot of things which had the style of handwriting of a sharp letter, but they were relieved within "the Oie school of calligraphy" that was a standard book style in those days so as to be severe at time. People who engaged in these as a Calligrapher might be unemployed people of the samurai family.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：江戸版 筆工 書家 置散子

1. 研究開始当初の背景

「江戸版」の研究は、近年、柏崎順子氏の『増補松会版書目』(平成二一年刊)に代表されるように、ますます体系的かつ精緻になってきつつある。しかし、従来からかなりの研究蓄積のある挿絵の研究に比べ、江戸版のもう一つの独特の特徴と言われている本文版下の書風については、どのような階層の者たちが筆工となっていたのかを含め、まったくといってよいほど研究は進んでいなかった。

2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、近世前期刊本、とくに江戸における出版物の本文版下の書風を明らかにし、そこから版下作成に従事した筆工たちの文化的階層を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

- (1) 近世前期の江戸における出版物の本文版下の詳細な分析。同時代の上方出版物との比較検討。
- (2) 近世前期の書流、とくに当時の代表的な書流である御家流書家の手本を収集し、その書風の整理。
- (3) (1)(2)を踏まえての考察。

4. 研究成果

近世前期刊本における江戸版と上方版の造本の違いは、印刷する紙、文字の筆跡・書風、そして挿絵の画風である。この書風については、従来「独特の字風」とか「文字の独特の雰囲気」というような、かなり曖昧な言葉でしか言い表されてこなかった。

近年、柏崎順子氏は、「所謂江戸版特有の文字は、江戸の特定の流派に属する筆耕者が版下の製作に関わっていたことを示している。」と指摘され、さらに「所謂江戸版の文字の流儀も厳密に言えば何種類かに分類できるが、版下の筆耕を個人の資格で多くの人間が担当していたとは思えない。そこで思い合わされるのが師宣風の挿絵の問題である。師宣風の挿絵は師宣個人の仕事ではなく、師宣工房のようなものが存在していて、複数の板木下絵師によって挿絵が制作されていたという説である。挿絵制作の行程が特定の工房に委ねられていたとすれば、版下の筆耕も特定の流派の師弟仲間に委ねられていた可能性が高い。」(「江戸版考 其二」)として、江戸版の本文版下に携わった筆工像に言及している。この指摘を踏まえながら、以下のような検討をした。

江戸版の版下の筆跡を考える上で第一の問題は、多くの研究者が江戸版について、「独特の字風」とか「独特の味わい」などと指摘している、その「独特」という時の中身・実態である。どう独特なのか、本当に独特なのか、ということである。第二の問題は、この第一の問題と関連して、江戸版の版下を實際

に担当した筆工の問題である。つまりどのような人たちが書いたのか、という問題となる。

まず第一の問題。山本九左衛門版『うすゆき物がたり』(寛文四年刊)は、丸々とした書風であり、山本九左衛門版にはこの書風のものが多い。本家筋にあたる京正本屋都の山本九兵衛の出版物にも同じような書風のものが多い。本の大きさの違いによって、字詰めの窮屈さや文字自体の大きさが異なり、一見異なった書風に見える場合でも、丸々とデフォルメされた書風は基本的に同類である。この書風は、山本九兵衛だけではなく上方の多くの正本屋(鶴屋喜右衛門・八文字屋八左衛門など)の出版物に共通したもので、半丁を十数行、一行の中に字と字をほとんど重ねるようにして書く、という丁単位での様式を同じくしていた。その意味で、山本九左衛門は、上方の正本屋の版下の作り方を、丁単位の版式と文字の書風双方の面でほぼそのまま踏襲して造本していたことになる。

この様式を踏まえながら、丸々とした文字の書風を離れた出版物こそが、従来特に江戸版の独自性を言われていたものである。これらは、かなりの幅はあるものの、鱗形屋、松会、本問屋その他の出版する草紙によくあらわれる書風である。山本九左衛門版が、上方正本風の丸々とデフォルメされた書風であったのにたいし、これらは、「はね」や「はらい」を大きく、「折れ」を丸まらずにしっかりと角度を付けた、鋭く、緊張した版下の書風である。たしかにこれらは上方版にはあまり例を見ない。

ついで第二の問題。江戸版の挿絵は、「師宣」風という点で、上方の版本の挿絵にたいして明らかに「独特」である。上方版にも後には「吉田半兵衛」風、という特色ある画風が生まれるが、江戸版の盛んであった十七世紀の半ばころの挿絵は穏当なものである。私は、このような上方版の挿絵の多くを、伝統的な扇の絵や奈良絵本の挿絵を描いていた者たちが請け負っていたのではないかと想像している。一方そのような伝統のなかった江戸では、当然扇や奈良絵本の制作に携わる者たちがいなかった。その代わりをつとめたのが、当時風俗画で名を売り出していた町絵師たち、すなわち「師宣工房」とでも称すべき「特定の流派」の町絵師たちであったということなのであろう。その結果が、上方版の挿絵にたいして「独特」という印象を生んだのである。

しかし書をとりにく環境は、絵の場合とはまったく異なっていたことに留意する必要がある。手習いの手本として当時出版された本には、題簽に「御家」「尊円」という宣伝文句を添える例が数え切れない。上は幕府や諸藩の右筆から、下は寺子屋の師匠まで、当時の社会における「御家流」「尊円流」の立場は圧倒的だった。書に関しては、京都で挿

絵を請け負っていたと考えられる扇や奈良絵本の絵師たちが江戸にはいなかった、というように京都と江戸の違いはなかったはずである。

ではどのような人たちが、版本の本文の清書を請け負っていたか、ということであるが、青木鷺水の浮世草子『古今堪忍記』巻二「貞女の堪忍」(宝永五年出版)に、さる藩を致仕し浪々の身となった男の京都での暮らしが描かれている。この浪人の身過ぎの種は、若い時に身につけた「筆とりて物かく」能力であった。このような「筆耕(工)」に浪人が多かったことは従来漠然とだが、指摘されている。

かれら「筆工」は、『古今堪忍記』にいうように、人から様々な種類の本の写本製作や版本の版下書きを請け負い、書に関わることで生きていた者たちであり、諸職案内記に「能書」や「能筆」としては名のあがらない無名書家たちである。武芸とともに手習い・学問を学んだ武士崩れの浪人たちの身につけていた書は、世間一般と同じく、おおかたが「御家流」「尊円流」であったと見て誤らない。

では、上方の筆工も江戸の筆工も、当時の書の標準であった「御家流」や「尊円流」を身につけていた者たちであったとすれば、なぜ江戸版の書風には上方の版本と異なった「独特」の書風、という印象を受けるのであろうか。そのことはやはり依然謎としかいいようがないが、広義の複製関係にある上方版の『人倫名』と江戸版の『人倫名』を比べてみたときなど、その書風の違いは印象としてはっきり感じ取れる。江戸版の本文版下を作るさい、筆工は、もとの上方版を透き写しながらも、その書風にかなりのアレンジを加えていったようである。具体的には、かなりぞんざいに見える上方版の線を、一画一画、抑揚を強調し、「はね」「はらい」「折れ」といった運筆を大きく、時には過剰とってよいほどに表現していたのである。

江戸版においては、これよりずっと小さな文字サイズで、しかも強く崩して書かれた場合でも、この一画一画の抑揚を強調し、「はね」「はらい」「折れ」といった運筆を大きく、時には過剰に表現する、という特徴は一貫している。

基本的な御家流の流儀はそのままに、上方版の書風に変化をつけることによって、江戸版の文字の書風は、かなり大胆に、あらあらしく、鋭く見えてくるのである。

では、江戸版の筆工と想定される浪人を中心とした江戸の市井の書家は、本当にこのような書風をもっていたのだろうか。当時江戸で出版された版本で、明確に「御家流」「尊円流」を謳い版下が書かれたものは、そう多くない。そのようなものは書の手本以外ありえないのであるが、そのわずかな例の中に、延宝年間の数力年に数点の手本を著し出版した隠岐置散子という書家の版本がある。置

散子がどのような者であったのかは、今のところまったくわからない。しかし出版された手本から見るかぎり、広い意味での尊円流、御家流の書家であったことは間違いなく、書風は典型的な「御家流」「尊円流」の概念におさまる書風である。

ところで、その同じ置散子が、延宝七年に江戸の本問屋が出版した『今川準書』(小泉吉永氏蔵)の巻手本を残している(架蔵)。この自筆手本の書きぶりは、版本にうかがえるような典型的な「御家流」「尊円流」の書風より、一歩、あらあらしさ、鋭さをまし、むしろ、角張った、あらあらしい、緊張した書風に近い印象を受ける。つまりは、当時の江戸にいた「御家流」「尊円流」の書家たちの筆法の中に、鱗形屋、松会、本問屋といった本屋から出版された、われわれが今まで「独特」といつてきた典型的な江戸版の版下文字の書風と重なるものがあつた、ということではなからうか。

江戸の書家は、版本の版下を請け負うさいに、よくある穏当な御家流そのままではなく、それをやや過剰にした、角張った荒々しい書風を好んで用いたのではないだろうか。その背景には、挿絵と同じく、最近指摘されたような「有体物としての、見た目の体裁」(柏崎氏「江戸版考 其三」)を上方版と違いよう、という本屋のリクエストがあつたとも考えられる。江戸版の本文版下の「独特」の中身は、意外にも江戸の御家流の範囲におさまるものであつた可能性があり、その「独特」の意味合いは今後より慎重に再検討される必要があるのではなからうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

母利司朗、近世前期江戸版の本文版下、京都府立大学学術報告、査読無、64号、2012年、29-42頁

〔学会発表〕(計 1件)

母利司朗、近世前期江戸版の本文版下、東海近世文学会、2012年4月7日、熱田神宮文化殿会議室

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

母利 司朗 (MORI,Shiro)
京都府立大学・文学部・教授
研究者番号：10174369

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：